

現代 大衆 小説 論

紙で夢みる。

筒井康隆
ABOUT

上野昂志著

大藪春彦
ABOUT

五木寛之
ABOUT

半村良
ABOUT

山田風太郎
ABOUT

江戸川乱歩
ABOUT

平井和正
ABOUT

川上宗薫
ABOUT

宇能鴻一郎
ABOUT

横溝正史
ABOUT

世、人気作家11人を中心に、作家
と作品を鮮やかな切り口で解剖して
みせる、小説より面白い
異色評論集。



現代大衆小説論

上野昂志著

うえの こおし

1941年東京生まれ。1966年東京都立大学人文科学研究科修士終了。

著書に『沈黙の弾機』（青林堂）『魯迅—その沈黙と言葉への抗い』

（三一書房）『基中有論』（白夜書房）『現代文化の境界線』（冬樹社）等がある。

紙上で夢みる

—現代大衆小説論—

定価 一三〇〇円

著者 上野 昂 志

発行者 荒 木 清

発行所 蝸^か牛^{ぎゅう}社^{しゃ}

東京都練馬区南大泉町30—3

電話（〇三）九二四—四九一一

振替口座東京九一六二七六八

印刷・浩文社 製本・イマキ製本

© KŌSHI UENO 1980

目 次

物語の始まり	半村 良論	3
敗戦に偏執するもの	大藪春彦論	21
変容せる肉体の博物館	山田風太郎論 1	41
明治のぞきからくり	山田風太郎論 2	63
ディスカバー「怪奇幻想」	横溝正史論	85
錯乱する距離	江戸川乱歩論	104
「快感」に縛られた性	川上 宗薫論	123
瓦礫の上のウルフガイ	宇能鴻一郎論	123
夢の終わり	平井和正論	142
物語としての五木寛之	筒井康隆論	164
夢のあいまに、またはあとがきという物語	五木寛之論	180
		210

物語の始まり

——半村良論——

1

はんむら・りょう 一九三三年東京生まれ。都立第三高校（両国高校）在学中からパーテンダー見習のアルバイトをやり、卒業後は紙問屋の店員を皮切りに各種の職業を転々とする。昭和三十八年の第二回SFマガジン・コンテストに処女作「収獲」が当選し、SF作家として出発。『産霊山秘録』で第一回泉鏡花賞。短篇「雨やどり」で第七十二回直木賞をそれぞれ受賞。『石の血脈』『軍靴の響き』『妖星伝』等の長篇とともに人情嘲風風の短篇をよくする。

父親はタクシ一の運転手、母親は結婚したときからずっと内職のしどおし、本人は三流高校を出てすぐ就職したが幾つか職をかえて、現在の小さなプラスチック成型工場に見習工として入って二年目。半村良の『闇の中の系図』の主人公・浅辺宏一の履歴をいえば、こういうことになる。なんの変哲もない、ありふれた青年。このままいけば、会社が順調に続いたとしても、浅辺は工員として一生を終わるだけだ。新型魚雷の進路誘導用電子装置のプラスチック部品を五分に一個ずつ作り出す仕事。一時間に十二個、一日八時間で九十六個、単調な、ひたすら神経をすりへらす仕事の繰

り返し。

そのなかで、浅辺宏一は、少しずつ「嘘」で自分の身を飾っていったという。きっかけは、見習工として入ったときに、少し年齢をくっていて、場違いな印象を与えたので、何か事情がありそうに見せたのが始まりだった。周囲の眼にあわせて自分の身を装っているうちに、いつか嘘に嘘が重なり、浅辺は、やがて独立して同じような会社をやるために、一時的にここで仕事をおぼえている男、ということになってしまった。

「嘘」はいつか「真実」として流通し始め、それ自体でふくれあがり、浅辺は実際に工場をやめる破目になるが、それだけでは止まらずに、彼は「嘘」を専業として生き始める。だが、物語の発端をなす小さな「嘘」、町工場で、どころんでもたいして良くなりっこない生活を飾るためのささやかな「嘘」をついてるくだりは、十分にありそうなことである。わたしたちは、大なり小なりこういう「嘘」をまき散らしながら暮しているからだ。積極的にはいわなくとも、頭のなかではいじましい願望が渦巻き、その願望にアクセントをつけた眼差しで自分の生活にヴェールをかぶせようとするのだ。その意味では、偉大なる「嘘部」の末裔・浅辺宏一の登場のしかたには、彼と同じような境遇を生きてきた半村良自身の経験が重ねられているのである。つまり、総じて意にそまぬ生活をしているものが、目下の現状を脱け出たくて、しかも、到底そんなことは不可能だとあらかじめ知っていて、だからこそ、いじましい願望を胸に抱きつつ、その空想Ⅱ妄想で現在を飾ろうとするというように、である。

もしも億万長者なら……きわめて月並みな仮定である。だが、悲しいことに、わたしたちはこん

な仮定にすら楽々と乗りきれないほどにいじましく、だから、空想をも身の丈に合わせて切り刻んで、せいぜいが給料の十倍か百倍ぐらいの金が自由に使えたらなどということを考える。空想が現実であればあるほど、それが実現される手だてもまた真実味を帯びてくるのであろう。もっとも、空想のなかでいとも容易に思われるその手だてすら現実には実現不可能だからこそ、いくら真実味をもっても、それは永遠に「らしさ」の域を出ないのであるが。

そして、人は、たいていそういう空想を、所詮は空想として握りつぶしながら生きていく。握りつぶさなかったら、しかもそれが現実の尋常な手段で実現できなかったら、彼は犯罪者になるしかないからだ。それは、他人が見てどれほど貧しい空想であつてもそうである。十年近くも前のことだったか、ある少年が誘拐をくだてて身代金五百万円を要求した事件があつた。とりわけ異常なこともないこの犯罪に、わたしがひどく胸を突かれた想いをしたのは、その少年が、誘拐で得た金五百万円についての使途を、あらかじめこまかく明細書のように書き並べていたという事実があつたからである。背広五着、靴十足、ワイシャツ十枚、靴下……と、並べられているのはごくありふれたものばかりであり、しかもいずれも日常的な買物品目に入るものばかりが、それぞれの単価と合計が表にされていて、総計で五百万円になるのだ。わたしは、その貧しさにうたれた。おそらくこの少年は、彼なりに精一杯に欲望をふくらませてこの表を作つたのであろう。しかし、そうやって加算した結果は、五百万円にしかならなかったのだ。貧しさは、端的に欲望の貧しさとしてある。絶えざる欠如感にさいなまれて、その飢えを満たすべく想い描く妄想、しかしそこに現われる具体的なかたちはいかにも貧しい。欲望そのものが、すでにして奪われているのだ。だが、にもか

かわらず、その貧しい欲望を妄想として抱くことで、われわれは、決してひきあわない犯罪をなし得るのである。

人はなにも、使用価値においてのみ商品を買うのではない。一着の洋服を欲しがるのは、たんに着るものに不自由しているからではない。それを手に入れることで、手に入れ身につけることを通して実現する意味、を買おうとするのだ。誘拐事件を起こした少年にとって、五着の背広が必要だったわけではないはずだ。彼は五着の背広をいっぺんに手に入れるということの意味するものを、欲したのである。それを、たんに金持ちになることと同義と受けとるなら、われわれにとつての消費の意味を見失うことになるであらう。彼は五着の背広という具体物に憑かれていたのであり、しかもそれは、五着の背広に還元さるべきものではないのだ。欲望の貧しさは、この社会が、商品しか手に入れられない社会であるというところに、本質的に規定されている。彼は、五百万円分の品物を強奪することなど決して望まず、五百万円でそれを買うことを欲したので。そこにこの少年の、そしてわれわれの欲望の秘密が隠されている。

『闇の中の系図』の主人公の「嘘」にも、これと共通のものがある。いや、というより、ものを媒介にしないだけに、欲望は直接的に「嘘」に現われているといったほうがいいのであらう。それは我々の、夢というにはあまりに現実的な、それでいて実現不可能な妄想に直結している。と同時に、これが「嘘」ではなく「もの」に結びついていたなら、『闇の中の系図』という小説は、いままあるようなかたちではなく、犯罪小説になっていたのであらう。推理小説のように、妄想の結果としての犯罪を、謎として解くのではなく、妄想を肯定して、それを実現させるための犯罪をも肯定す

る犯罪小説である。大藪春彦の作品において典型的なかたちである。しかし半村良はそうしなかった。そこに半村の物語の独特なスタイルがある。

彼はここで妄想を肯定する。しかしそれは、主人公が「嘘」として現わしている妄想の内容ではない。「嘘」という妄想の形式を肯定するのだ。そのために、半村はひとつの仕掛けをする。浅辺宏一のような嘘つきが、現在ばかりでなく歴史的にもたくさん存在していて、それが明治までは、「嘘部」という職業的集団として歴史の裏面で活躍していたという設定である。主人公はそこで、「嘘つき」という通常の社会ではマイナス価値になるものを、才能として肯定され、さらに、政治の裏側でその嘘を使った工作に従事するというように、社会的な役割としても肯定されるようになる。半村良がSFという枠を用いるのは、このような「肯定」による物語作りを容易にするためであったということができるだろう。これが、「現実的」に嘘を肯定し、嘘の内容を肯定するという方向に向かっていたら、繰り返すが、犯罪小説になっていたはずだ。そしてさらに、ことばの上で「現実的」というのでなく、現実そのものとして肯定していったとしたら、小説ではなく、犯罪になっていただろう。

だが、犯罪になり得たかもしれない妄想を、紙の上で肯定するところから出発するというのは、なにも半村良に限られたことではない。大衆的な小説というのは、基本的にそういうものなのだ。実現不可能な夢、といってしまえば、あたかもその内容が大変なもののように思われもするが、むしろそんなことはない。背広五着をいっぺんに手に入れるということだって、われわれの多くにとっては、実現不可能なのだ。絶対に実現できないということではなくとも、それをしてしまえ

ば、生活が破綻してしまうということにおいては不可能なのである。現実の社会がそれを強いるのだ。それ故、わたしたちは、他人の眼から見ればどれほど貧しいものであろうと、それを夢として生きてしまうのである。世に大衆小説といわれるものは、その夢を出発点として、なんらかのあたりで紙の上にそれを実現していくものなのだ。だからこそ、それは現実にとつての代償物ともなるのだろうか、代償物だからといって非難さるべき筋のものではない。批判さるべき点があるとなれば、それが、われわれの欲望を不断に肯定しつつ煽りたて、ついには満たされぬ夢の虜にしてしまわないところにこそあるのだ。

さて半村良は、大衆的な物語の伝統に忠実に、欲望が孕む夢を肯定するところから出発する。そしてここに半村の物語の特徴があるとすれば、まず第一に彼が、貧しい青年の貧しい夢に執着することであり、第二に、その夢なり妄想なりを肯定する手つきをそのまま、物語の展開として見せていくことであり、第三に、これはもう少し別な要素とあわせて考えなければいけないのだが、とりあえず、夢の内容よりは形式を肯定するという点である。

『闇の中の系図』でもそうだが、貧しい青年の貧しい夢に執着するというのは、半村作品の少なからぬ部分において見られる特徴である。直木賞受賞作となった「雨やどり」に代表されるような人情斬などは、その執着によって成りたったものというべきであろう。夢の実現を、SF的趣向で極大化しながら肯定していく手前で、日常のほうに帰着させた作品群である。だが、物語作家としての半村の面目は、むしろそれを出発点として肯定して極大化する方向にある。ただ、出発点が貧しい青年の貧しい夢としてあるところに、極小から極大への展開が、物語そのものの展開であると

同時に、物語化する作者の夢の発展・展開としてあるという特徴が見られるのだ。

紙問屋の店員、プラスチック成型工、バーテンダー、板前見習、喫茶店、バーの経営、クラブ支配人、連れ込みホテルの番頭、肉の仕入れ、ビリヤードの支配人……といった職業を半村良が転々としたというのはよく知られたことだが、彼の作品に登場する貧しい青年の貧しい夢には、たしかにその時代の記憶が影を落しているといえよう。

だが、ここでは肝腎なことは、その点ではない。これは、半村良の物語の特徴の第二点、第三点とも不可分のだが、貧しい夢をその内容よりも形式、たとえば「嘘」というところで肯定し、その肯定の手続きをそのまま物語の趣向にしていこうというところに、嘘を紙の上で現実化する物語作者としての半村良が重なっているということ、それなのである。

おそらく、半村が職業を転々とするというところには、むしろ現実の必要もあっただろうが、それ以上に、それぞれの場で満足するにはあまりにも過剰な夢を抱えこんでいたということがあったと思う。いつも、いまいる場にそぐわないという想いを噛みしめているのだ。そのときどきの夢想、あるいは妄想が何だったかは知らない。また知ったところで、たいしたことはないだろう。それよりも、常にそのようなものを抱えて、それをなけば現実として生きてしまったものは、職場を転々としながら、夢の実現を空想しなければならぬということなのである。小説を書くことは、半村良にとって、そのような夢を解き放つことにはかならなかったのだ。そこで彼の夢が実現したかどうかは知らない。ただ、少なくとも、夢を肯定する場を見出したことだけはたしかである。そしてそのような場を確保した半村は、彼の主人公たちにも、夢が肯定される場を用意してやるの

だ。

2

わたしが好きな短篇に「旧約以前」という作品がある。

主人公は、ツキというか運というか、とにかくそういうものに徹底的に見放された男で、とにかく小さい頃から、やることなすこと全部、裏目に出てしまう。木登りをすれば落ちてケガをし、試験を受ければ決まって覚え忘れた問題が出る……などという程度のこととはまだましなほうで、学校の廊下を走れば教師につかまるか、小さな子にぶつかってケガをさせる、近所の子どもと野球をやれば、彼の投げるボールは必ず他所の家のガラスを割るか、通行人にぶつかってしまふ。要するに、彼のやることは全部ダメになるのだ。何をやっても何度やっても必ずそうなることがわかってから、この男は、ひたすら規則を守って生きるように努めるようになる。規則といっても、法などという大それたものばかりではない。学校や会社のなんでもないような規則から、エチケットとかマナーと呼ばれるようなもの、はては、自分のなかでやらないほうがいいと思ったという程度のことまで、とにかく抵触しないように小心翼翼と身を持していく。

その結果、ひどく影の薄くなった男に、最初は、母親が、注意を払わなくなる。彼が会社から帰って挨拶しても返事をしなくなり、やがては、ひとりで食事をしていても気づかなくなる。ついで、会社の同僚や上司が彼に注意を払わないばかりか、彼の存在を忘れるようになる。さらには、店で品物を買おうとしても、店員が相手にしなくなる。と、そこで変化が起きる。母親が食事を作

ってくれなくなり、食物を買うこともできなくなった男が、飢えに耐えかねて、パン屋のショーケースからパンを取って食べても、店員はそのことに気づかないのだ。試しに、自転車を、走ってくるバスにぶつけてみると、自転車は壊われ、バスは止まって、事故はたしかに起こるのだが、誰も彼を見ないのである。

そこから、いままでの男を押えつけてきたネジが弾け飛んだかのように、男は、してはならないことの一切を次々とやる。行き当りばったり人に殺し、勤めていた会社の社長を殺し、かつて恋してふられた女を犯し……だが、それらの「犯罪」に、誰も彼の存在を認めようとしめない。事柄だけを受けとめて、彼を見ようとしないのである。影が薄いということばは比喩だが、ここでは、文字通りその薄さが徹底して、見えなくなってしまうのである。この話の最後は、なんでも自由にできるのに、存在が認められないために自由を味わうことのできない男が、やがて天に昇り、宇宙の涯に至って「光あれ」と念じるところで終わる。男の意識からすれば、物語法則からも見放されてしまったということなのだが、客観的には、物理法則をも超えてしまったのである。そして、いうまでもなく、光はあるのだ。

この作品のおもしろいところは、マイナスのカードばかり引いていたのが、あるところで逆転してオールマイティになってしまう点にあるが、その出発の、何をして裏目に出してしまうというところ、そして、男のそのようなマイナス性を徹底的に肯定して重ねていくところに、半村良の特徴が出ている。ツイていないとか運が悪いということは、誰にでもあることだろうが、その、ふつうは偶然的にあることを、半村は徹底させて一人の男の存在様式にしてしまうのである。『闇の中

の系図』の主人公の場合は、嘘つきという存在様式を、それ自体として肯定していつて「嘘部」の末裔にしてしまうのだが、ここでは、一切の社会的規範のなかでそれに抵触しないように身を縮めている男の、そのあり方を肯定していつて、一切の法を超えた神にしてしまふのだ。

ところで筒井康隆が商業誌に初めて発表した作品に、「お助け」というのがあるが、これが半村の「旧約以前」によく似ているのだ。よく似た構造をもっているが、発想が対照的で、そこに筒井と半村の違いが出ているのである。

「お助け」は、一人の男が、ある日、細君から、最近のあんたは、喋り方も何をいつているのかわからないくらい早いし、動作も、いつも人殺しに追われているみたいで、やりにくくてしようがないと文句をいわれるところから始まる。男は、そういわれて考えてみると、どうもこの頃、時間の経つのがひどくのろく感じられて絶えずイライラする自分に気がつく。だが、身体も悪くなければ頭もおかしくない。考えられる唯一の原因は、彼の職業である宇宙ロケットのパイロット訓練である。その加速実験が、眼に見えないところで彼の身体に影響を与えているのかもしれない。がよくわからない。とかくするうちに、彼のテンポは外界の二倍になり三倍になる……と、ここから半村の「旧約以前」とよく似たかたちになるのだが……彼の眼には外界がすべて静止しているように映り、それとの関係は稀薄になり、まったくの孤独を強いられるようになる。その孤独を破るために、彼は、銀行強盗をしたり、建物を壊したりするが、彼のテンポについていけないふつうの人間にとっては、それはただの突発事故にすぎず、従って、彼と外界との関係は回復しようもない。かくして彼は一個の宇宙意思、つまりは「神」になってしまった……と見えたとき、破局が訪れ

る。破壊の限りを尽して道路に寝そべっている彼の身体を、一台の大型トラックがひどくゆっくりと押し潰してゆくのである。彼は悲鳴をあげる、「神様、お助けを！」。

ここには、ひとつのことを肯定的に拡大させていって破裂させてしまうという筒井康隆の作品の特徴がすでに現われているが、そしてその点でも、夢を肯定するもうひとつの世界を提示する半村良との違いはあるのだが、さしあたってそのことは問わない。むしろ際立っているのは、「お助け」が「旧約以前」とよく似た展開をしながら、その発想において違っているという点である。両方ともに、外界との異和を顕在化させた男を主人公としながら、出発点が微妙に違うのだ。「お助け」では、男は、彼の生活のテンポが通常よりはるかに速いことを、女房から指摘される。これは、そもそもスピードというものが外との関係のなかで決まる相対的なものだということとも無縁ではないが、女房の指摘によって知るといことは、他者から見られた自己が、つまり自意識が、主人公の運動を促すということなのだ。異和の根拠は自意識にあるのである。それに対して半村良のほうは、異和は、この男の存在に内在したものとして描かれているのだ。何をやってもことごとく裏目に出てしまうというのは、初めのうちこそ偶然にも見えるが、実は、この男の存在そのものが、世界の秩序と調和しないようにできていた、ということなのである。

おそらくこのことを、半村の生活のほうにもどしてみれば、半村良は、もともとこの世のなかには、最初から恵まれていて何をやってもうまくいく人間と、反対に、何をやっても決して浮かびあがれない人間とがいるという素朴な世界認識をもっているということになるだろう。これまでの生活のなかで、彼自身がいやというほど、何をやってもうまくいかないということを経験してきたの

であろうし、また、そういう人間をたくさん見てきたのであろう。これはたんに自意識の問題ではない。大仰に言えば、この社会における階級の問題だが、しかしむろん、半村良はそのようにはいわない。彼はただぼそぼそと「運命」だというばかりである。そして、そのような「運命」にとらえられているものを、別の次元に生かして解き放つてやるのである。現実からのシッペ返しを恐れて何ひとつ自由にできない男は、一切を自由に作り壊す「神」となり、嘘つきは、嘘部となって活躍するのである。ここに、半村がSF的な設定を用い、伝奇的な趣向を用いる理由がある。彼には、ここに現われている世界とは異った、もう一つの世界が必要だからだ。ここで貧しい妄想としてしか現われない夢が、あるいは微かな徴候としてしか見えない現象が、そして曖昧な伝説としてしか語られない歴史が、一挙に現実として肯定されるために、である。

こうして、『英雄伝説』では、ムラサキイトユリという植物をめぐって古代の出雲系の神社群が姿を現わし、『黄金伝説』では、青森県の北戸^へ来^きの高原に、古代ギリシャの聖地が現われ、遮光器土偶そっくりの宇宙人が飛来し、『石の血脈』では、吸血鬼伝説を中心にして、巨石信仰や人狼説話の世界が浮上してくる。いずれにおいても、初めに設定されているのは、現在のわれわれの生活圏と隣りあわせの日常世界であるが、そこに徴候として、あるいは謎として見え隠れしているものが、やがて一筋の脈絡のもとに浮かびあがてくると、そこにもうひとつの別世界が現実化してくる、という構造になっている。読者としてのわれわれの興味は、むろん、これらの別世界が、あぶり出しの絵が現われるようにじわじわと見えてくるところにひかれるわけだが、そうして現われる世界に特徴的なのは、これが血族を基盤とした世界であるという点である。『石の血脈』では、血